

決して渴くことがない水

ヨハネの福音書 4章 1-15節

はじめに

今日の聖書箇所は、有名なイエス様とサマリアの女の出会いの出来事が書かれています。この二人の出会いの出来事は、4：42まで続きますので、数回に分けて学ぶことになります。今日は、1-15節を学びますが、今日の聖書箇所のキーワードは、「**水**」です。水を巡って、イエス様とサマリアの女の会話が始まり、展開していきます。

イエス様は、「**ユダヤ**」で人々にバプテスマ（洗礼）を授けておられました。すると次第に、人々は、バプテスマのヨハネよりも、イエス様のほうに集まって来るようになりました。そしてイエス様は、バプテスマのヨハネよりも多くの弟子を作って、弟子たちを通してバプテスマを授けるほどになっていたのです。その噂が「**パリサイ人**」の耳に入った時、イエス様は人々にバプテスマを授けることを止められて、ユダヤを去って、「**ガリラヤ**」へと向かわれたのです。パリサイ人とは、イエス様に妬みを覚えて対立し、最終的にイエス様を十字架に付けることになるユダヤ教の一派です。イエス様はこの時、不必要な対立を避けるため、ユダヤを去って、ガリラヤへと向かわれたのでしょう。しかしユダヤからガリラヤに向かうには、4節にあるように、「**サマリア**」を通って行かなければなりません。サマリアは、ちょうどユダヤとガリラヤの間に挟まれている地方でした。

ユダヤとガリラヤは、歩いて三日ほどかかる距離であったそうですが、イエス様は、旅の疲れを覚えて、サマリアの「**スカル**」という町に来られ、そこにあった「**ヤコブの井戸**」の傍らに座り、休んでおられました。6節を見ると、「**時はおよそ第六の時であった**」とありますが、新改訳聖書の欄外脚注を見ると、「**正午ころ**」とあります。日の出が朝の六時だとすると、それから六時間たった「第六の時」は、ちょうど昼の十二時頃ということなのです。

私はこれまでずっと、この「ヤコブの井戸」は、サマリアのスカルの町の中にあると思っていましたが、どうやらヤコブの井戸とスカルの町は、2km程離れた所にあったようです。というのは、8節を見ると、「**弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた**」とありますから、ヤコブの井戸とスカルの町は、離れた所にあったことが分かります。スカルの町の人々は、毎日、水瓶を担いで2kmほどの距離を歩いて、水を汲みに来ていたのです。しかも当時、水を汲みに来るのは女性の役割であったようで、女性は毎日水を汲みに来る時に、近所の女性同士で楽しくおしゃべりをして「井戸端会議」をしていたようです。

1. わたしに水を飲ませてください

イエス様が昼の十二時頃に、ヤコブの井戸の傍らで座って休んでいると、一人のサマリ

アの女が水を汲みに来ました。そこでイエス様は彼女に、「わたしに水を飲ませてください」と言われます。イエス様はなぜこの時、自分で水を飲まずに、サマリアの女に水を飲ませてもらうとしたのでしょうか。それは 11 節にあるように、イエス様は旅の途中だったので、「汲む物」を持っていなかったのです。ヤコブの井戸は、深かったので、鶴瓶やバケツなどの汲む物がなければ、水を汲むことができなかったのです。そこでイエス様は、ちょうど水を汲みに来て、汲む物を持っている彼女に、「わたしに水を飲ませてください」と言われたのです。

しかし彼女は、イエス様のこの言葉に非常に驚くのです。なぜなら、9 節にあるように、「ユダヤ人はサマリア人と付き合いをしなかった」からです。ユダヤ人とサマリア人は、もともと一つの民族でした。このサマリアの女も「私たちの父ヤコブ」と言っていますが、ユダヤ人もサマリア人も、「イスラエル」と呼ばれた「ヤコブ」の子孫であり、一つのイスラエルという王国を作っていました。しかしこのイスラエルという王国は、北イスラエル王国と南ユダ王国に分裂し、北イスラエル王国はやがて、アッシリア帝国に滅ぼされてしまいます。北イスラエル王国の首都が「サマリア」の町であったのです。アッシリア帝国に滅ぼされた時、サマリアの町の指導者は異国の地に連れて行かれ、その代わりに異邦人たちがサマリアに移り住むようになりました。そして、サマリアの町の人々は、異邦人と結婚し、異邦人の神々を礼拝するようになりました。ただサマリアの町の人々は、主なる神様を捨てたわけではありませんでした。彼らは、主なる神様を礼拝すると同時に、異邦人の神々も礼拝したのです。そのようなサマリアの人々を、ユダヤ人は軽蔑し、異邦人として扱い、汚れた民と見ていたのです。

そのような背景があるので、サマリアの女は、ユダヤ人であるイエス様が自分に話しかけてきて、しかも汲む物を一緒に使わせてほしい、「あなたの汲む物でわたしに水を飲ませてほしい」と言われたことに、非常に驚いたのです。当時、ユダヤ人とサマリア人の間では、あり得ないことであったのです。

2. わたしはあなたに生ける水を与える

するとイエス様は、驚いている彼女に向かって、10 節でこう言われます。「もしあなたが神の賜物を知り、また、水を飲ませてくださいとあなたに言っているのがだれなのかを知っていたら、あなたのほうからその人に求めていたでしょう。そして、その人はあなたに生ける水を与えたことでしょう」。イエス様は今、彼女に水を求めています。本来なら彼女がイエス様に水を求めるはずだと言われます。今、彼女がイエス様に水を求めているのは、二つのことを知らないからだと言われます。それは、「神の賜物」と「イエス様が誰なのか」ということです。もし彼女が、「神の賜物」と「イエス様が誰なのか」を知っていたら、彼女のほうからイエス様に「水をください」と求めていただろうと言われるのです。

彼女はこの時、イエス様が誰なのかを知りません。12 節で「あなたは、私たちの父ヤコブより偉いのでしょうか」と聞いているように、イエス様が「天から遣わされた神の子」である

ということを知らないのです。そしてイエス様が彼女に、何を与えてくださる方なのかを知らないのです。イエス様が彼女に与えてくださる「神の賜物」とは、「生ける水」だとイエス様は言われるのです。

「生ける水」とは、「生きている水」という意味です。「生きている水」とは、動いている水のことです。つまり「湧き出ている水」とか「流れている水」を意味します。逆に「死んでいる水」とは、動いていない水のことです。「溜水」「水溜まり」を意味します。動いていない水は、濁って腐ってきます。決して飲むことはできません。しかし、動いている水は、新鮮で飲むことができます。イエス様が与えてくださる水というのは、そのように「湧き出ている」「流れ出ている」ような「生きている水」なのです。

しかし「ヤコブの井戸」の水も、そのような「生きている水」でした。6節に出てくる「井戸」という言葉は、「泉」とも訳せる言葉です。「泉」とは、地面から「湧き出る水」のことです。その意味で、ヤコブの井戸の水も、「生ける水」なのです。ですから、サムリアの女ははっきり、イエス様が与えると言われた「生ける水」とは、ヤコブの井戸の水だと思い込んでいるのです。ですから彼女はイエス様に、「あなたは汲む物も持っていないのに、どうやってこの深い井戸から水を汲むのですか？」と言っているのです。

3. いつまでも決して渴くことがない水

ヤコブの井戸の水も「生ける水」であり、イエス様が与える水も「生ける水」です。では、ヤコブの井戸の水とイエス様が与える水は同じなのでしょう。それとも違うのでしょうか。13-14節でイエス様は、こう言われます。「**この水を飲む人はみな、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます**」。

イエス様は、ヤコブの井戸の水を飲む人は、また渴くと言われます。それゆえ、この水を飲む人は、毎日水瓶を担いで2kmほど歩いて、井戸に水を汲みに来なくてはなりません。しかしイエス様が与える水を飲む人は、「いつまでも決して渴くことがない」と言われます。「いつまでも決して」という言葉は、「永遠に」という意味です。なぜイエス様が与える水は、永遠に渴くことがないのでしょうか。一度飲むと、渴くことがない特殊な水だからでしょうか。そうではないように思います。イエス様の水が永遠に渴くことがないのは、「その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出る」からです。ヤコブの井戸の水も「泉」でした。地面から水が湧き出ていました。しかしヤコブの井戸の水は、私たちの「外」にありました。それゆえに、毎日、水瓶を担いで2kmほど歩いて水を汲みに行かなければなりません。しかしイエス様が与える水は、私たちの「内」に与えられるのです。私たちはもう「外」に汲みに行かなくて良いのです。私たちの「内」に、絶えず、永遠に水が湧き出てくるからです。私たちは、渴いてもすぐに飲むことができるのです。私たちの内に絶えず、永遠に水が湧き出てくるからです。その意味で、イエス様が与える水は、永遠に渴くことがないということだと思えます。

現代に生きる私たちは、各家庭に水道があり、蛇口をひねれば、いつでも水が出てきます。飲みたい時に、あるいは使いたい時に、いつでも水を飲み、使うことができます。その意味で、私たちも水道代さえ払えば、決して渴くことはありません。しかし二千年前のイエス様の時代は、そうではなかったのです。毎日飲み水や生活用水を、井戸まで汲みに行かなければならなかったのです。現代でも、1月に起きた能登半島地震では、断水が起こり、被災地の人々は給水所まで水を汲みに行かなければなりません。被災地の人々が願うのは、一日も早く、水道が復旧することです。そして、給水所まで水を汲みに行かなくて済むように、家の蛇口をひねれば水が出るようになることです。

イエス様が与える水というのは、家に水道が繋がりと、蛇口をひねればいつでも水が出るようになることに似ているような気がします。家の中でいつでも水が飲めたり、仕えたりする、それが「その人の内で泉となる」ということではないでしょうか。イエス様が与える水は、「永遠のいのちへの水が湧き出る」と言われていますが、この「湧き出る」という言葉は、他の聖書箇所では「飛び跳ねる」と訳される言葉です。チョロチョロと水が出るというのではなく、非常に勢いよくドバドバと水が出るということなのです。つまり蛇口を全開にしているような状態です。私たちは、あまり家の蛇口を全開にはしません。蛇口をひねったら、必要ない時はすぐに閉めます。なぜなら水道代を気にするからです。しかしイエス様が与える水は、水道代を気にする必要はありません。10節の「神の賜物」という言葉は、「無料で」「ただで」という意味の言葉です。つまりイエス様が与える水は、私たちが求めさえすれば、「無料で」「ただで」与えられるのです。ですから私たちは、いつでも蛇口を全開にしていることができるのです。イエス様が与える水は、家の蛇口を一日中全開にしているようなものです。費用は一切かかりません。飲みたい時に飲み、使いたい時に使えるのです。それゆえ、私たちはいつまでも決して渴くことがなく、「外」に汲みに行く必要もないのです。

おわりに

最後に私たちは、イエス様が与える水は、一体、何を表しているのかを見て終わりたいと思います。イエス様が与える水は、「永遠のいのちへの水が湧き出る」と言われているように、ただの水ではないことが分かります。ヤコブの井戸の水は、私たちの体の渴きを癒します。しかしイエス様が与える水は、私たちの魂を癒すのではないのでしょうか。聖書に、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる」(マタイ 4:4)とあります。人は、パンや水だけでは生きることにはできないのです。パンや水は、私たちの体を支えます。しかしパンや水は、私たちの魂を癒すことはできません。私たちの魂は、神様しか癒せません。私たちの魂は、「神様のことば」と「聖霊」によって癒されることができるのです。

イエス様は、ヨハネ 7:37-39 でこう言われました。「『**だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、**

生ける水の川が流れ出るようになります。』イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われたのです。ここでは、イエス様が与える「生ける水」とは、「御霊」つまり「聖霊」のことだと説明されています。私たちは、イエス様を信じる時に、私たちの「内」に「聖霊」が与えられます。聖霊は、「生ける水」と言われているように、「生きている」のです。そして私たちの「内」で泉となって、イエス様の恵みを絶えず私たちに注ぎ続けてくださるのです。使徒パウロは、聖霊が私たちの「内」で結ぶ実は、「**愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制**」(ガラテヤ 5:22-23)だと言いました。聖霊はいつも、私たちの内に共にいてくださり、永遠に、私たちに愛と喜びと平安を注ぎ込んでくださるのです。そして、私たちの内に、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制という人格的な実を結んでくださり、私たちを造り変えてくださるのです。そのように、聖霊と共に永遠に生きるいのちこそ、「永遠のいのち」です。

私たちはもはや、自分の「外」に愛や喜びや平安を求める必要はありません。私たちは、イエス様を信じる時に、自分の「内」に聖霊が共におられ、私たちに絶えず、永遠に愛や喜びや平安を注ぎ続けてくださるからです。イエス様は、あなたが求めるなら、「生ける水」を与えるとされます。「生ける水」は、神の賜物であり、「無料で」「ただで」与えられます。ただイエス様を信じるだけで与えられます。私たちも、サマリアの女のように、「**主よ。私が渴くことのないように、ここに汲みに来なくてもよいように、その水を私に下さい**」とイエス様に祈るなら、誰でも今日、この場で与えられるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、パンや水だけでは、本当の意味で生きることはできません。私たちの魂の渴きを癒すのは、イエス様の生ける水だけです。どうか私たちに聖霊を与え、私たちの魂を癒し、愛と喜びと平安を絶えず注ぎ、私たちを造り変え、永遠のいのちに生かしてください。この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。